

ロバートソンにおける「ラッキング」と「保蔵」

—実物理論からのアプローチ—

同志社大学 仲北浦 淳基

I. 本報告の目的

D. H. ロバートソン（1890-1963）は、ピグーの後任としてケンブリッジ大学経済学教授をつとめた人物である。彼は、1940年ごろ、すなわち、ケインズ『一般理論』が多大な影響力をもち始めるころまで、ケインズと双璧をなす経済理論家であった¹。しかし、現代において、彼の名前は忘れ去られてしまっている。その原因としては、Presley (1981, 182) の「ロバートソンはアフタリオンの門弟だった」という、ロバートソンの特異性を強調した評価や、Fletcher (2000, 1-2) の「現代マクロ経済学の謎の人物」という評価が挙げられるだろう。ロバートソン研究の重要な二著者でさえ、彼を英国経済学史上に位置づけることができなかつたのである。

報告者は、ロバートソンこそ英国経済学の伝統を継承し、その伝統をマクロ的分析に発展させようとした経済学者だとする立場である。そして、その伝統・革新の両側面を示すために、彼の実物理論 *real theory* に注目してきた。たしかに、Presley (1981) や Fletcher (2007) も、ロバートソン体系において実物理論が重要だということを認めていた。ただし、彼らは、その事実をもって、ロバートソンは大陸経済学から多大な影響を受けたと解釈し、マーシャルなど英國経済学から見ると異質だと主張した。しかし、実際のところ、先行研究は、彼の実物理論そのものについて、「非貨幣的 non-monetary」な要素——技術革新、農業の豊凶、心理——を列挙したにすぎず、包括的には明らかにしてこなかった。

ロバートソンにとって「実物 *real*」とは一体何だったのか。これが、報告者の根本的な問題意識である。

そこで本報告では、ロバートソンの実物理論を、彼の「努力 *effort*」概念から包括的に捉え、加えて、従来、彼の 貨幣 理論 の中心的概念とみなされてきた「ラッキング」と「保蔵」の両概念についても、実物理論の観点からアプローチする。そ

¹ Deutscher (1990, 188-195) によると、マクロ経済理論に関する論文における引用数を、*Index of Economic Journals* で集計した結果、1920年から1939年を通して、ついにロバートソンはケインズと首位を争っていた。しかし、1940年以降は、ケインズ『一般理論』の席巻とともにロバートソンの存在感は急速に薄れていった（第4位）。

うすることで、これまで「ほとんど理解不能」と評されてきたロバートソンの諸概念を、実物理論の観点で一本化する。そうすれば、彼の理論に通底する思想の一端を明らかにすることができます。また、この研究を敷衍すれば、ケインズとの対立原因をより明確にすることができ、ケンブリッジ学派の経済学を再評価することにも繋がっていくであろう。

II. ロバートソンの実物理論——『産業変動の研究』と「努力」概念

ロバートソンの実物理論を概観する前に、まずは、本報告の検討対象である「ラッキング」と「保蔵」の定義を確認しておく。ロバートソンは両概念を次のように定義している。

ラッキング：「所与の期間に、その期間における自分の経済的産出高の価値よりも少なく消費するならば、それはラッキングをしている」（BP, 41）

保蔵：「自分の貨幣的請求権を使うことも他人に譲り渡すこともせずに、単に自分の現在の貨幣ストックに加えるだけならば、それは保蔵である」（BP, 46）

ロバートソンによるこのような定義は、現代のロバートソン研究者のみならず、1920年代30年代の経済学者をも悩ませた。しかし、困難の原因は、彼らがロバートソンの最初の著作『産業変動の研究』*A Study of Industrial Fluctuation* (1915) を前提としなかったことにあると考えられる。

『産業変動の研究』は、経済変動の実物的要因を明らかにした著作だが、その議論は、彼の後期における貨幣理論にも通底している点で重要である。

ロバートソンは、マーシャルにならって、経済学を人間の研究とみなし、経済活動を〈「犠牲 sacrifice」から「満足 satisfaction」を得る活動〉と捉えた。すなわち、人間は「満足」を得ようと欲し（需要），その欲求を満たすために「犠牲」を負担する（供給）。そして、その「犠牲」のことを、ロバートソンは「努力 effort」と呼んだ²。

「努力」とは、すべての人間が、「満足」を得るために負担しなければならない心身的な苦痛を指す。つまり、肉体労働、頭脳労働、貯蓄、投資など、考えうる全

² 「努力」概念は、マーシャル以来の伝統的な用語であり「真実費用 real cost」を含意している。さらに遡れば、アダム・スミスの「労苦と骨折り」にも通ずる概念である。英国経済学におけるロバートソンの伝統的側面については、仲北浦（2017c）を参照のこと。

ての仕事を含んだ概念である。これら種々の「努力」が結合することで、財・サービスが生産される。そして、この「努力」量の変動こそ、産出量の変動、すなわち、経済変動（産業変動）を意味するのである。

ロバートソンによると、経済変動は、「努力の生産性」（「犠牲」から「満足」を得るときの効率）の変化にともなって生じる。従来、農業の豊凶や発明の発生など、様々に語られてきたロバートソンの経済変動の「実物的要因」は、すべてこの「努力の生産性」によって包括的に説明されるのである（仲北浦 2018）。

まとめると、ロバートソンの実物理論とは、「努力」すなわち人間の活動にともなう心身的な苦痛（真実費用 *real cost*）と、その結果としての生産物の産出量を分析する理論である。また、「努力」量（すなわち産出量）の決定においては、「犠牲」と「満足」のバランスをとる個人の意思決定がもっとも根本的な要素となる³。

III. 実物概念としての「ラッキング」

『産業変動の研究』では、「努力」は、「即時の満足」を得るものと、「将来の満足」を得るもの（「待忍 *waiting*」）とに大別されるにとどまっていた。しかし、ロバートソンは、「待忍」をさらに「貯蓄」と「投資」に細分して分析しようとした。というのは、両者は、主とする経済主体が異なるのみならず、そこで発生する本質的な負担（真実費用）の性質が根本的に異なるからである。彼は第三作目の『産業のコントロール』 *The Control of Industry* (1923)において、「投資」の本質的な負担を「リスク負担」に見出した（仲北浦 2016a）。そして、「貯蓄」にともなう本質的な負担こそ、かの「ラッキング」である。

「ラッキング lacking」とは、「貯蓄」にともなう心身的な苦痛を指す。すなわち、〈現在の消費を我慢すること〉にともなう心身的な負担である。ゆえに、「ラッキング」は「消費欠落」と訳すこともできよう。ただし、いずれにせよ重要なのは、「ラッキング」が人間の活動にともなう負担そのもの（「努力」、真実費用）を捉えた概念であり、実物的な概念だということである。ゆえに、この概念自体は、決して貨幣的概念ではない。

³ 個々人は、「満足」から「犠牲」を差し引いた「純満足 *net satisfaction*」を極大化するように「努力」量を決定する。

「ラッキング」という心身的な負担の結果、ある資源が消費されずに残され、次なる生産活動に充てられる（投資）。こうして「ラッキング」という負担は、新たな生産物を生み出すかたちで「将来の満足」に結実する。この過程では、「ラッキング」（貯蓄）を担う「公衆 public」と、「リスク負担」（投資）を担う「実業家 business man」との意思決定の調整が不可欠である。そして、その調整を担うことが「銀行家 banker」の最大の役割である（仲北浦 2017b）。

その調整において重要な役割を果たすのが貨幣である。貨幣量を追加的に発行すると、財の量と貨幣量とのバランスが崩れ、物価水準は高騰する。すると、それまでと比べて生産物を購入できる量が減少する（実質所得 real income が減少する）。これは「強制貯蓄 forced saving」と呼ばれ、この強制的な〈我慢〉の真実費用は「自動的ラッキング」と呼ばれる。すなわち、本来、個人の意思決定にもとづくはずの「努力」が、「銀行家」の追加的な貨幣発行によって、個人の意思から離れて強制的に実行させられるのである。

このように、「ラッキング」は、本来的には個人の意思決定にもとづく蓄財活動の負担を指すのだが、追加的な貨幣発行という要因の導入によって、個人の意思に反した負担（「自動的ラッキング」）が発生することを明らかにしている。

IV. 「ラッキング」と「保蔵」の関係

個人の意思か否かにかかわらず、「ラッキング」（消費欠落）が負担されると、ある資源は消費されずに残される。しかし、中には投資に充てられないものもある。このように、資源が消費されずに残されたにもかかわらず、投資に回らない「ラッキング」のことを、ロバートソンは「不妊 abortive ラッキング」と呼んだ⁴。これが「（実質）保蔵」である⁵。すなわち、「保蔵」も「ラッキング」からは派生した概念なのである。

このような用語や分類は、現代では奇異に感じられるが、これらの概念でロバートソンが分析したかったのは、「貯蓄」と「投資」の不一致である。そもそも主な

⁴ 逆に、投資に充てられるものは「充用 applied ラッキング」と呼ばれる。

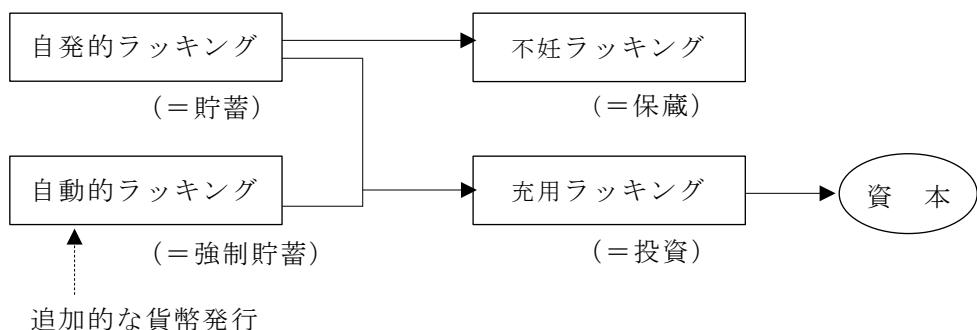
⁵ 「保蔵」の定義において「貨幣ストック」という言葉が表れているため、「保蔵」は貨幣的概念とみなされてきた。しかし、「貨幣的請求権」という言葉からも分かる通り、ロバートソンは実物的な側面からも見ている。つまり、ロバートソンは「保蔵」の説明において、無意識のうちに、貨幣と実物の両側面を混在させてしまっており、この事実が、彼の主張を分かりにくくしていると考えられる。

経済主体を異にする「貯蓄」と「投資」という経済活動において、それぞれの意思決定が一致する保証はない。「貯蓄」（「ラッキング」）と「投資」（「リスク負担」）における意思決定のギャップは、「保蔵」や「強制貯蓄」のかたちで現れる。すなわち、貯蓄>投資の場合は「保蔵」が生じており、貯蓄<投資の場合は「強制貯蓄」が生じるのである。

ただし、個人の意思決定による「ラッキング」（「自発的 spontaneous ラッキング」）が「保蔵」される分には問題はないのだが、「自動的ラッキング」によって強制的に捻出された資源が「保蔵」されることは問題である。というのは、「保蔵」された資源は次なる生産活動に充てられないので、当然、「将来の満足」も生みださないからである。このように、強制貯蓄において負担された「努力」は、「保蔵」されてしまうことで、何の成果も生みださないまま無に帰してしまう場合があるのである⁶。

しかし、『一般理論』のケインズは、ロバートソンの「ラッキング」概念（とくに「自動的ラッキング」あるいは「強制貯蓄」）を「最悪の混乱 worst muddle of all」（GT, 183, 訳 180）と評した。だが、ロバートソンにとっては、経済活動の本質的な源泉である「努力」（真実費用）こそが分析対象として重要だったのであり、その活動と負担が個人の意思決定にもとづくものかどうかに主眼があった。ここに、ロバートソンの実物理論の特徴と、彼がそれを重視した理由とが見出されるのである。

図1 「ラッキング」と「保蔵」の関係



【参考文献】は報告レジュメをご参照ください。

⁶ このような見方をふまえると、現代においては、追加的な貨幣発行にともなう「強制貯蓄」を発生させようとしながらも、それによって生み出された資源（貨幣）が「保蔵」されている、と見ることができるだろう。